2017年度鳴門市人権地域フォーラム
テーマ　「ひとごと」から「わがこと」へ
～自己をみつめ、語り、人と人とがつながる人権学習～

■と　き　2017年8月4日(金)13:30～16:30
■ところ　鳴門うずしお会館
コーディネーター　A (松茂中学校教諭)
パネリスト　B (広島大学名誉教授)
C (八万中学校教諭)
D (香川県土庄中学校2009年度卒業生)

≪司会者≫

それでは、本日お招きしました講師の皆様をご紹介させていただきます。恐れ入りますが講師の皆様は、お名前をお読みいたしますので順次壇上の方へご移動くださいますようお願いいたします。

初めに、本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます、松茂中学校教諭　Ａさんです。続きまして、パネリストの方々をご紹介させていただきます。広島大学名誉教授　Ｂさんです。八万中学校教諭　Ｃさんです。香川県土庄中学校卒業生　Ｄさんです。それでは、これ以後の進行につきましては、Ａ先生、よろしくお願いいたします。

≪コーディネーター　A≫

(ニコニコと元気よく)皆さん、こんにちは。今回パネリストとしておいでいただきましたＢ先生が書かれた「差別・被差別を超える人権教育」という、1990年から1991年の板野中学校における全体学習の取り組みを分析していただいた論文。この書籍に関わるフォーラムを昨年度開催しました。Ｂ先生には、昨年度は体調を崩されているということで、来ていただくことができなかったんですけど、今年は、お身体の方も回復されて、広島から徳島に来ていただきました。昨年度のフォーラムでは、この書籍の中に登場する「Ｋ子さん」「HI君」「YIさん」、1990年から1991年の板野中学校における全体学習に取り組んだ、当時の中学生のこの３人が、パネリストとして、壇上で当時の全体学習への思い、今の自分について語ってくれました。

(切々と)そこには切ない現実が今もあります。部落差別をなくしていく、その営みが、後の40歳になる彼、彼女たちの人生に何を残してきたかという問いかけに、部落差別の現実を鋭く提起してくれました。

その中で、「Ｋ子さん」は中学校時代を振り返り、こんな話をしてくれました。友だちの家に行った時に、玄関先で友だちを待っていた。家の奥で友だちとお婆ちゃんの声が聞こえた。私がそこにいることをお婆ちゃんも気づいていないし、友だちも気づいてない。「あのな、Ｋ子ちゃんは部落の子やけんな、あんまり遊んだらあかんよ。」そんなお婆ちゃんの声が聞こえる。ドキドキした。友だちは(お婆ちゃんの差別発言に)何て返してくれるんだろうか。ずっと息をひそめた。すると友だちが、「お婆ちゃん、わかっとるけんな。」と言った。私は、聞かなかったふりをして、その後友だちと時間を過ごした。それがずっと心の中にある。

これが、当時の地区の子どもたちの生活の現実なんですね。そして、彼女は、同じ板野中学校出身の１歳年上の男性と交際を始め、結婚の約束をします。すると、その結婚を約束した男性のお母さんから、直接に電話がかかってきます。

「Ｋ子ちゃん、あなたは部落の人だから結婚を認めることができない。結婚はやめてほしい。」と直接言われます。彼女はその時、「来たか」と思うんです。そういう現実の中で、彼女がその差別を乗り越えられたのは、やっぱり、中学時代に学年全体で部落問題を語り合った全体学習、その絆の関係が彼女の人生を変え

てくれた。彼女は、同和教育の意味、部落問題学習のあり方というのを鋭く私たちに提起をしてくれました。

HI君は、結婚相手に厳しい差別を受けます。結婚をと考えている彼女から言われます。「HI君、まさかあっちの人と違うよね。まさか部落の人と違うよね。」その言葉に対して、彼は必死に言葉を返します。「そうだよ」と答えます。そう言われて、その彼女は相当なショックを受けていました。

彼がその彼女を私の家に連れてきた場面があります。それは忘れることはできません。でも、彼は、２人で何度も話し合いをしながら、その彼女やその家族の差別意識を見事に変えていきます。そして、すごく素敵な家庭をつくっていきます。それはやっぱり、中学時代、本気で部落問題を語り合ったその関係があるから、しっかりと乗り越えていけるんです。部落差別の現実は切ないです。苦しいです。でも、それを見事に乗り越えていく力になるんです。

そういう力を培っていった授業記録、その授業での一人一人の語りをＢ先生が、的確に分析をしてくださいました。その書籍の中で、繰り返し登場するYIさん、彼女は地区出身ではない子です。地区ではない子どもたちにとったら、同和教育は一つの思い出なんですね。しかし、地区出身の子どもたちには、(部落問題は)自分の生き方をかけた闘いです。地区、地区外、この立場の違いは、やはり本当に大きなものがあります。

Ｂ先生に分析していただいた、この子どもたちとの出会いから26年が経過していますが、その本気で語り合った授業で培った絆というのは、何年経っても一人一人の中に生き続けていきます。そういう教育実践が全国のすべての学校で、様々な地域で、豊かに広がり、確かな実践につながっていくことを願いながら、実践記録を紹介し続けています。この場もそうです。

この鳴門市人権地域フォーラムでは、この10年あまり、前半のパネリストの語りを受け、後半、話を受け止めていただくフロアの皆さんが、マイクを持って自分自身の内にあるものを語り合っていく場が設定されてきました。私たちは、そういうやり取りの中で、自分自身を深く見つめることができていくんだと思います。今回も、パネリストの思いを受け止めた、皆さんの思いが会場にあふれていく時間にしていきたいと思います。

最初に、この「差別・被差別を超える人権教育」という書籍をまとめていただいたＢ先生からお話をしていただきます。それでは、Ｂ先生、よろしくお願いします。拍手をお願いいたします。(拍手)

≪パネリスト　B≫

(ゆっくりと立ち上がり)Ｂと申します。本当は、昨年ここに座らせていただく予定でありましたが、突然脳梗塞になってしまい失礼いたしました。今年は何とかこうして来させていただくことができました。私も非常によろこんでおります。

(一言一言を丁寧に)私がお話したいことはお手元に資料がございます。「差別・被差別の両側から超える『呼びかけ(訴え)－応答』の関係性はいかにして形成されたか？」副題に「1990～1991年度板野中学校の実践から」と付けさせていただいております。

1990～1991年度というのはどういう時かと言いますと、Ａ先生が板野中学校に変わって来られた最初の時期です。私としては、この最初の時期ということがとても大事なことだと思って注目したわけですが、Ａ先生の実践の原点というべきものが、この中にあるのではないかと思っております。

1990～1991年というのは、今から26年前ですから、当時15歳の子どもたちが、現在41歳くらいになるんでしょうか。昨年、その40歳、41歳の３名の方がこの席に座られているわけです。「私が意図しておりますのは、学校・学年・学級という制度的な枠組みのもとにある生活世界の中で沸々と生成している教師―生徒、生徒―生徒の関係性が、「部落問題学習」によってどのように変わることができたかについて、「実践記録の解読を通して検討することである」、と書かせていただいております。

とりわけ私が重要だと思うのは、一人一人唯一無二の独自的な存在である生徒たち、そこに一人一人の尊

厳があるわけですが、それが授業の中で自分の「思い」を「言葉」にする発言行為。

それは様々な声であり、共に交わし合う声でもある。その相互作用であり、そこに生み出される教師と生徒、生徒と生徒の間の関係性である、と私は考えます。この関係性は、「呼びかけ(訴え)―応答」の関係性であると、私は勝手に名づけております。

授業の中で自分の思いを言葉にしていくという発言行為、それ自体が一人一人の子どもの独自のものである。それが相互作用し合う中から、また新たな関係性が生まれてくる。それがどういうふうにして生まれてくるのかということを考えてみたいと思っているわけです。

ここで、「言葉」というふうに言っておるわけですが、私は、この子どもたちに実際に会ったことはありません。実際に授業を観たこともありません。何をしたかと申しますと、全ての実践記録を徹底的に読みました。ビデオのあるものについては、ビデオを何度も何度も観ました。ですから、昨年ここに座っていただいた方々は、ビデオを通して、顔は非常によく覚えておりまして、後で写真を見まして、26年経って全く変わっていない顔であることに驚きました。けれども、それはこのくらいでおいておきまして、お話したいことを進めてまいりたいと思います。

まず、1990年度に全体学習というものが始まったわけですけれども、この点につきましてはごく簡単に触れたいと思います。資料の１番に、①から④と挙げておりますが、①では、当時の校長をされていた方の言葉がありましたので、それを引用しました。ちょっと読んでみます。

「当初は、案じたように、生徒の発言は少なく、せいぜい書いてきたものを読む程度で積極的な話し合いにはなかなか進まない。まして、部落問題について自分の体験を語るということは、さらに難しいものがあった。そうした空気を一変させたのが、1990年12月13日、Ａ先生が全体学習の後半部分である学年全員学習を進めた資料『私の目をみて！』における(生徒Ｋ子の)最後の発言であったと言える。」(当時の板野中学校校長 漆原先生の2000年時の回想、『峠を越えて』2000)ということです。

このＫ子さんが昨年ここに座って発言されたわけですが、このＫ子さんが、授業の中で「泣き崩れてしまう」ということが起こったわけです。これをきっかけに大きく変化していくということが起こるわけですが、当時、Ａ先生がどんなことをなさったかということをそこに書いておきました。

②の、Ａ先生が「自分をさらけ出す」ということで、「生徒(Ｋ子)の必死の叫びに応えて、私は今まで超えることのできなかった大きな峠を越えることができた。その峠とは、部落に生まれた自分の悲しみや苦しみを訴えることであり、その苦悩の中から同和教育の実践を自分の生命の営みとして、同和教育に取り組むよろこびをつかんできた自分の生きざまを生徒一人一人にぶつけていくことだった。今までは、さりげなく、何気なく、自分が部落出身であることを語ったことはあった。しかし、50分の授業を丸々むきつけにひたむきに自分をさらけ出したのは初めてであった。」と語っておられます。

Ａ先生がどういう方かということは非常に大事なことだと思うんですが、そのことはまた後で触れていきますが、次のところを見ていただきたいと思います。

③に書いていますが、昨年ここに座られていたYIさんが発言されたものを挙げております。ちょっとそれも読んでみます。「自分の中の差別心はなくなっていないが、きれいごとでなく、言い合いになったとしても、本当の自分の気持ちを言うことで、プラスになるものが生まれてくる。」「たとえば今日の授業だったら、融和運動はいけないと資料に書いてある。だけど、本当はどうなのかということをみんなで考えていくことができ、自分の考えはちょっと違うとか、本当の自分が言えるようになって、それだけ真面目に取り組むことができ、本気でぶつかっていくことができるようになった。」これがYIさんの発言です。

このYIさんというのは、翌年３年生になってからは学級委員長をするような生徒なんですが、その後の授業で次のような事を話しています。「去年、同情融和運動について、Ａ先生と言い合いをしたことを覚えているんだけど、(これは実践記録を読むと本当に面白いです。Ａ先生に本当につっかかっていって、なかなか納得しないというやり取りが非常に面白いんですが、これについては実践記録を読んでいただければと思

います。YIさんの文章に戻ります)今思うとその時はあまり同情融和運動の本質が理解できていなかったと思います。今年水平社宣言を通して同情融和運動について考えてみると、間違いが見えてきた。」そういうふうに語っています。

YIさんについてはもう一つ言葉を引用させていただきます。こんなことを言っていますのでちょっと読んでみます。「私は中学１年の時、やっぱり道徳の授業とかもあったけど、自分のクラスに部落の子がいて、あんまりめったなことを言ったらやっぱりやばいなとか思っていて、結局きれいごとで、なんにも差し障りのない言い方しか言えなくなって、それで２年生の時に、全体学習とかで本音を語るということを学んで、家のこととか一番自分の醜い部分をさらけ出し始めて、それからですよ。真剣に取り組み始めたのは。３年生になってから振り返ってみたら、今は、部落とかそんなのは関係なしに、差別している社会とかに立ち向かっていけると思うんです。そういうふうに自分が変われたことが今はとてもうれしいです。」というふうに言っています。

やっぱり面白いですね。「あんまりめったなことを言うとやっぱりやばいかなと思って」ということを堂々と授業の中でしゃべっているんです。こういう語る中で段々と考えるようになって、家のこととか自分の一番醜い部分をさらけ出し始めて、それから真剣に取り組み始めたと言っているんです。

地区外の生徒のこういうところ、これは1990年度の生徒の中で起こったことのおもしろい部分、おもしろいという言い方がいいかどうかはわかりませんが、実践記録を読んで印象に残ったところです。

続いて1991年度ですね。1990年度はＫ子さんが泣き崩れるということがあって、それがきっかけとなっていろいろなことが起こっていくわけですけれども、その次の年、1991年度にどういうことが起こったかを考えたいと思うんですが、「全体学習の発展―３年Ｂ組（Ａ先生の担任）を中心に」この３年Ｂ組といいますと、1980年代、テレビで「３年Ｂ組　金八先生」というのが注目されましたね。武田鉄矢が金八先生を演じていましたが、それは全くの偶然で、私は金八先生とＡ先生は違うと思うんですが、皆さんはどう思われたでしょうか。それはまた考えてみていただければと思います。

Ａ先生が自分をさらけ出すということをされた。このさらけ出すということがどういうことなのか、もう少し考えてみたいと思います。Ａ先生が語ったことをここにいくつかあげておきました。

「1991年度の授業実践は、私自身の生きざまをさらけ出すところから始まった。」

ここには書きませんでしたが、Ａ先生のライフストーリーと言いますか、いわゆる自分史のようなものです。自分のこれまでの体験をいろいろ書いておられます。その中で先生ご自身が出された結論というのは、自分がいかに卑屈な人間であったかということですね。

被差別部落の出身であるＡ先生が、自分史を振り返ってみられる中で、出してきた一つの大きな問題は、自分がいかに卑屈な人間であったかということで、そのことを非常に強く感じておられました。その卑屈さから解放されていかないといけないとＡ先生自身が思われたわけです。そのために何ができるかといいますと、そこから私自身の生きざまをさらけ出すということになっていくわけです。

昨年、HI君がこんなことを言っていました。「この全体学習は１人の先生がきっかけで始まったものかもしれませんが、」という言い方をしています。この「１人の先生がきっかけ」というのは、確かに大事な所だと思います。この１人の先生というのはＡ先生のことですが、この後いろいろな人たちが加わることによって、協力することによって新しいものが生み出されていったということをHI君は強調しているんです。

ここで、私は、Ａ先生がどういう先生であるかということにもう少し目を向ける必要があると思うんです。先ず、何と言っても自分史を振り返る中で、自分は卑屈な人間で、これではだめなんだと、自分自身が卑屈さから解放されなければならないと、Ａ先生自身が考えておられたということです。そのために何をされたかというと、自分をさらけ出すということを考えられ、それを実践されるわけです。資料にいろいろ書いてありますが、その中からちょっと読んでみます。

「対象地区の生徒は、部落出身でない先生方に、綺麗ごとではなく、部落差別の中を生きていた教師自身の

醜さをさらけ出し、差別という衣服を脱ぎ捨て、自分たちと同じ裸になって生きていくことを心から期待している。そのことを先生方一人一人にわかっていただきたいと思う。（A先生の実践記録より）」

つまり、教師自身が自分の醜さをさらけ出していかないといけない、差別という衣服を脱ぎ捨てていかないといけない、それを一人一人の先生に本当にやっていただきたいと訴えているA先生の言葉です。

その後の文章をもう一つ読んでみます。「どの学校にも本気の先生はいるが、なかなか自分をさらけ出せないのが現実である。それは、自分が突き進んだ時、自分の後ろに誰もついてきてくれないという寂しさを知っているからである。でも、板野中学校の全体学習では、全部のクラスが公開授業に取り組み、その指導案には、教師自身の生きざまを綴るということが当たり前になっており、みんなで本気に取り組んでいくというよろこびを多くの教員が共有してきた。（A先生の実践記録より）」

さらに、その次を読んでみます。「私は、板野中学校に来る前から同和教育や道徳教育に取り組む機会が多かったし、私自身の中に、この教育にかけるものも大きいものがありました。しかし、全ての教師が私と同じ思いを持っているわけではありません。だからこそ、様々な思いを語り合い、一人一人にできることを求めて語り合っていくことが大事になっていくと考えます。」

これは、A先生の講演記録から引用したんですけど、こういうふうに言っておられます。今のところを読んでみると、非常に面白いことを言っておられると思うんですね。つまり、様々な思いを語り合うこと、その上に一人一人にできることを求めて語り合うこと、これが重なり合わされているわけです。様々な自分の中にあるものを自由に語り合うこと、しかし、それだけでは進まない。一人一人にできることは何かということを求めて語り合うことがその後に続かないといけない。そういう重なり合わせで、A先生の語りというのは非常に特徴があると思うんですね。

他の引用を紹介するのはやめますけれども、A先生が何をされたのかということを、もっと具体的に考えていく必要があると思うんですね。１人の先生がたまたまおられて、その先生をきっかけで何か新しいことが生まれたという、ただそれだけではなくて、A先生という先生がどういう先生だったのか、その先生が何をされたのか、他の先生方との間で、あるいは生徒との間でどのような関係性をつくっていくことが大事なのか、そこをもっともっと議論をしていくことが大切だと思うんです。

そういうことをしていかないと、あれはA先生だからできるんだという声が逆に強まるわけです。「特別な先生だから」ではなくて、具体的に何をされてきたのかということを、実践記録をひも解きながらつかんでいかなければならないと思うんです。そのことが私は何より強調したかったことです。

もう終わってもいいんですが、もう一つお話しておきたいことがありますが、私の持ち時間はあと何分ありますか？(会場から温かな笑いが起こる中、コーディネーターから発言の続行を促され、言葉をつなぐ)そこで、同和地区の生徒が自分のことを名乗るということがどういうふうにおこなわれていくか。また、名乗った生徒に対して、他の生徒がどのように応答していくか。その関係がどう作られていくかということが非常に大事になっていくと思います。

まず、「名乗る」ということについて考えてみたいと思いますが、資料の２番、「名乗る生徒たち」というところを見てください。被差別部落出身の生徒が「名乗る」行為については、３つの段階に分けて考えることができる。１つは、自分が部落出身であるということに「気づく」という段階です。

早い子は小学校で知り、遅い子は中学校で知っていくということがありますけれども、それをどう「気づく」のか、そして、それをどういうふうに友だちに「打ち明けていく」か、そして、授業の中で実際に自分が部落出身であるということを名乗っていく、あるいは訴えていく。そういうことのつながりの中で、この「名乗る」ということが意味を持って来ると思うんですが、そこの詳しいところは省略させていただきます。

ここで、「K子さんの場合」ということですが、この「K子さん」というのは、先ほど申しましたように、前の年の全体学習が始まった年に、授業の中で泣き崩れるんですね。普段の授業等では、非常に活発に発言をする子だったんですけど、授業の最後の最後に泣き崩れて、言葉にならなくなってしまった。

そのことが、A先生が自分のことを生徒の前にさらけ出すということになるんですが、この「K子さん」がどのようなことを考えていたのかということを１つの文章を引用したいと思います。そもそも、この「K子さん」というのは、A先生のクラスの生徒ではなく、他のクラスの生徒なんですね。他のクラスの生徒が授業の最後に泣き崩れるということを通して、A先生自身が変わっていかれたんですね。そして、生徒たちの関係も変わっていくということになっていく。

そういう意味では、この「K子さん」がどういう人かということが非常に大事だと思うんですが、便せんにこういう文章を書いて、生活ノートに挟んで担任に提出するわけです。その便せんに書かれた文章です。

「先生、私、すごく、同和問題の授業をしているときが一番つらいと思います。クラスの全員が私の方を見ているような気がします。また、思うことなんだけど、みんな心の中では、『部落出身でなかってよかった』と思っていると思います。私だって中学１年のときは他人事のように思っていました。でも、いざ自分が部落出身だと気づいたとき、とても悲しかった。そして、とてもつらくて心の中では、これから隠していこうとさえ思いました。これが差別意識なんですよね。私みたいに考えている子がいるから差別がなくならないんです。」

この最後の部分が重要だと思うんです。「これが差別意識なんですね」と言っています。私たちがごく常識的に「差別意識」と言えば、部落外の人の持つ意識を差別意識だと言います。ところが、ここでは、部落出身のK子さん自身が、「これが差別意識なんですね」と言っています。

このことを後でもう一度触れますが、もう１人、例を挙げておきます。名乗った生徒ですが、資料のTKさんの言葉の後の部分ですが、この6月25日(1991年板野郡同和教育研究大会公開授業「同和教育への希い」丸岡忠雄)の授業では、部落出身であることを名乗って涙を流す生徒が多いわけです。

この授業の中でのTKさんの発言です。

「私も部落出身ですけど、泣いている子を見たら泣いてほしくありません。そして、その泣いている子の外側だけを見てほしくありません。悲しみが深いから涙が出て止まらないんだけど、この悲しみや苦しみを分かっている子がこのクラスにいっぱいいるし、…(言葉に詰まる)…ほんまは今泣きたいんだけど、涙をこらえています。」

なお、このKTさんには、「私も部落に生まれたんだけど、小学校５年生で自分が部落に生まれたことに気づいたんですけど、その時は、死んでしまいたいと思いました。今、この同和問題学習を積み上げてきて思うことは、嘆くことばかりでなく、怒りを持って、その怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって立ち向かっていくことで、人間は本当に変われるんだということがわかります。(1991年11月19日徳島県中学校同和教育研究大会公開授業「水平社宣言讃歌」西口敏夫)」という言葉もあります。嘆くばかりではいけない。怒りを持たなければいけない。この怒りをさらに言葉に変えて訴えていくんだというところが、非常に論理的によく考えた言葉だと思います。

この辺は不十分ですが、名乗るということを一人一人を取り上げていくと特徴のあるものが出てきますけれども、それも省略します。

次に、「応答する生徒たち」ですね。今のような名乗ったことに対して、どう他の生徒たちが応答していくかということについて、A先生が次のように語っておられます。

「３年生はすでに、２年生の時にすべてのクラスが公開授業の檜舞台を経験した。堂々と自分をさらけ出しながら、自らの想いをぶつけ合う生徒。仲間の訴えの中で、必死に涙をためて必死にうなずき応えようとする生徒。そんな中にあって、まだまだ本物になっていかない生徒の姿もある。そんな生徒に対し、怒りをぶつけ、時には優しく、時には厳しく論していく生徒の姿がある。そんな仲間の思いに応えるかのように、対象地区の生徒が自らをさらけ出して訴えていく。その思いに応えようと地区外の生徒が涙をこらえながら、その苦しく揺れる胸の内を語っていく。この同和問題学習は、お互いの存在、人間としての在り方、生き方

を確かめ合うものであった。」（Ａ先生実践記録から）

この、部落出身の生徒が名乗ります。訴えます。それに応えるということはどういう意味があるのでしょうか。そして、どう応えることが応答責任を果たすことになるのでしょうか。それを、資料の中で生徒たちが実によく表現しています。そこを読んでみます。

「部落出身だと打ち明けられた後もいつも通り接していくこと自体が、その子の力になって一緒に闘っていく証拠だ。(SEさん)」

「この授業の中で手を挙げて発表することが、その人を支えていくことなんだ。(YIさん)」

こういうような言い方です。非常にわかりやすいですね。こういう形で応える側は応答責任を果たすことができるんだと言い切っています。当たり前のことを当たり前に言っているわけです。その中で、なかなか応答できない生徒もいるわけですね。だから、こんな発言も出てくるわけです。

「こんなに一生懸命になって発言しているのに、どうして下を向いていられるのですか。(SNさん)」

このSNさんの非常に厳しい言葉ですが、この紹介した３名の生徒の発言は、いずれも1991年６月25日板野郡同和教育研究大会公開授業「同和教育への希い」(丸岡忠雄)の授業における発言です。この最後のSNさんの発言は、先ほどのＡ先生の言葉の中にある、「そんな中にあって、まだまだ本物になっていかない生徒の姿もある。そんな生徒に対し、怒りをぶつけ、時には優しく、時には厳しく論していく生徒の姿がある。」このことが、こういう生徒の発言としてあるわけです。

あるいは、こういう発言もあります。

「下を向いているのは、やめてください。何も逃げることもないし、何も恐れることもないと思います。緊張はみんな一緒だと思います。今日自分は手を挙げられなかったと過去形にしないで、この場で今という瞬間を大切にして語ってほしいと思います。(KTさん1991年11月19日徳島県中学校同和教育研究大会公開授業「水平社宣言讃歌」西口敏夫)」

もう１人紹介します。

「みんな信頼とかいっぱい言ってくれたけど、私はこの前ちょっと発表できなかったりして、みんなを裏切ろうとしていました。そのことを(Ａ)先生に言ったら、それは今まで信頼してくれた友だちを殺してしまうことになると言われて、すごくそれから悩みました。だけど、そんな私でも、みんながいてくれたから、これからも燃えられるようになるかなと思いました。(KKさん　10月31日全日本中学校道徳教育研究大会公開授業)」

Ａ先生は、すごい言葉でこの生徒に話しておられるわけですが、その発言を助けるように、KKさんの発言のすぐ後にこんな発言も続きます。この発言は同じSNさんですけど、今度は優しい言い方で、「私たちもKKさんのように発表してくれる友だちがいるから、これからも頑張ろうと思うし、今頑張れているんだと思いました。(SNさん)」

このSNさんという生徒は、今の発言は優しい言葉で言っていますが、先ほどの発言は、「下を向いているのはやめてください」というように、厳しい怒りを言葉にして発していました。こういう、SNさんのような生徒がいるということは、この３Ｂにとって非常にいい存在になっていると思うんですね。

実は、これには続きがありまして、MIさんという人が、この公開授業のもう少し後の1991年11月19日(徳島県中学校同和教育研究大会公開授業「水平社宣言讃歌」西口敏夫)の授業の中で、こんな発言をしています。

「私は下を向いたまま発表をしないときもあって、私を信じて必死に自分を語ってくれる人に応えず下を向いていることは、その人を絶望させ、その人を殺すことになると私も思うようになって、絶対私は、人を裏切る、人を殺すような人間はなりたくないと思いました。」

この中の「殺す」という言葉は、Ａ先生の言葉ですね。その言葉にも応えてこの発言をしているわけです。この、「信頼してくれた友だちを殺してしまう」という言葉は、実は、「信頼」という言葉の裏側にある厳し

いものを語っているように思われるんですね。自らのことを生徒の前にさらけ出したＡ先生だからこそ、生徒一人一人が真摯な呼びかけの主体になる、あるいは、責任ある応答の主体になるよう、ある意味、強いているという面があるんだと思います。

この場での「強いる」ということは、強制的に強いるのでも、暴力的に強いるのでもちょっと意味合いが違うと思うんですが、でも、Ａ先生は、生徒たちに対してあるものを強いているわけですね。そうは言いながら、SNさんの言っているように、そのためにはお互いに支え合う関係ができていくことが必要だと考えます。そういうように、生徒同士の中で支え合う関係ができる中で、Ａ先生の言われる厳しい言葉が生きていくということだと思います。

私は、それらの問題をさらに一般化してですね、「呼びかけ(訴え)－応答の関係性」と言っているんですが、非常に面白いことが出てきます。６月25日(1991年板野郡同和教育研究大会公開授業「同和教育への希い」丸岡忠雄)の授業ですが、３年Ｂ組の生徒たちは、リーダー的な生徒たちを中心に、「差別心」をめぐって独自の論理を構築するということです。

SEさん、YIさん、MM君、HI君などの発言が続いて、最後にSNさんが次のようなまとめをしています。

「自分が部落出身と聞いた時や、部落出身でないと聞いた時に、すごく悲しくなったりホッとしたりするのは、自分の中に差別心があるからだ。」

つまり、部落の子どもも、部落外の子どもも差別心を持っているということでは共通しているという言い方をしているわけです。初めの方でも、Ｋ子さんが「差別意識」という言葉を使っていました。一般には、差別する側の持っているものを「差別意識」だという言い方をすることが多いわけですが、この子どもたちは、部落の子どもも部落外の子どもも、差別心を持っている部分は共通していると言っているんですね。その結果として、一方はすごく悲しくなって、一方はホッとする、そういう違いがある。けれどそこには共通した差別心というものがある。

ある意味、生徒たちの言っていることは論理的だと思うんです。私は、そこは見落としてはいけないと思うんです。実にしっかりとした論理をしているわけです。そこにもっと目を向ける必要があると私は思っているんです。感情移入とかということも大事ですが、しかし、子どもたちがどういう論理を生み出していくか、作り出していくか、発見していくか、そのことが大事で、今日はそのことを強調したいと思います。

以上のようなことを話しましたが、もう時間が来ているでしょう。(会場から明るい笑い)これで終わります。

≪コーディネーター　A≫

(ニコニコしながら)ありがとうございました。拍手をお願いします。(大きな拍手)本当は１時間半話をしていただく内容なんですけど、短縮して話をしていただきました。それでは、続いてＣさんお願いします。

≪パネリスト　C≫

Ｃです。座って話をさせていただきます。今、Ｂ先生の方から話が出ましたが、1990年から全体学習がスタートしていくなかで、私が板野中学校に赴任したのが1991年でした。私が板野中学校に赴任した時には、全体学習はスタートしていました。Ａ先生と違う学年だったので、遠巻きに雰囲気が伝わってくるという状況だったので、自分の学年でどうやって全体学習をしていくのかということを考えていた時期だったと思います。

当時、私が教員を始めて４年目だったんですけど、「中学生はしゃべらないもの」という概念が、もう頭の中にこびりついていました。特に道徳や人権学習では中学生はしゃべらない、そういうことが普通なんです。だからもう、それは仕方のないものなんだと思っていたところ、Ａ学年の授業を観た時に、その思いをひっくり返されるような授業を目の当たりにしたんですね。

どうしたらこうなるんだろうと、自分なりに考えたりはするんですが、答えみたいなものがなかなか見いだせない中、Ａ先生と板野中学校で一緒に年を重ねていきました。同じ学年の時もありましたし、私は、同和担当教員、同和教育主事をしていたので、一緒に行動をすることが多かったんですが、確か2002年に、Ａ先生と私は一緒に板野中学校を出ることになったんですけど、身近な所でずっといろいろなことを感じることができました。

そこで学ぶことがたくさんあったんですけど、悔しい思いをすることも多々あって、それはどういうことかというと、先ほどＢ先生からも出てきましたけれども、「あの学校だからできる」とか、「あの先生だからできる」ということを、遠回しに伝え聞く場面が何度かあったんです。

「それは違うだろう」と、「板野中学校じゃないとできないものじゃないだろう」と、他の中学校でもできるのではないか、他の先生でもできるのではないかと思ったんです。当時の板野中学校の教員は全員全体学習をやっていたので、そう思ったのかもしれませんが、あの先生だからできるというのは違うだろうと思ったんですが、板野中学校にいてその声をあげても説得力がなかったので、当時、我々板野中学校の教員の中では、「板野中学校を出てからが勝負だな。出た先で何ができるのか、自分がどうやっていくのか、そこが勝負のしどころだな」ということをよく言っていたのを記憶しています。

2002年に私は板野中学校を出て、徳島市の応神中学校に行きました。それと同時に、その年の３月に法切れ(同和対策事業の財政に関わる特別措置法…地対財特法の終了、一般施策への移行)が起こります。その頃から今年2017年にかけて、心配しているのは、若手の教員に責任があるわけではないんですが、若手の教員や、小学生・中学生・高校生・大学生という、若い世代の部落差別意識、同和問題の認識がどうなのかということをすごく心配をしています。

熱心に取り組まれている行政区があるということも存じ上げてはいるんですが、ちょっと、トーンダウンしているのかなと思えるところもあるように思えます。それで本当にいいのかなと思い続けてきた15年間でした。それと同時に、昨年度と一昨年度、鳴門教育大学の大学院に行く機会があって、そこで研究をしていくわけですが、何を研究しようかと考えた時に、やっぱりこれまで自分がやってきたこと、積み上げてきたことというものを、もう一回総括をしておきたいと思いました。

先ほども言いましたが、全体学習のような取り組みは、本当に「ある学校」でしかできないのか、本当に「ある特定の人」しかできないのか、そうではなくて、できるための必要な要素をもし抽出できれば、いろんな学校で可能になっていくだろうし、他のいろんな人もできるようになっていく。このことを研究して抽出できないかということはこれまでも考えていたんですが、昨年と一昨年度で、（一冊の冊子をかざしながら）このような冊子にまとめてみたんです。

先ず、私が言うのは、集団で語り合う人権学習、言い方を変えれば、みんなで語り合う人権学習です。いろんな言い方があってもいいんですが、板野中学校における全体学習のようなものです。これの効果にはどういうものがあるのか、また、どういう意義があるのかということを、私の経験も含め、その当時一緒に勤められた先生方、当時の生徒、ですから、昨年ここに来てもらった３人にもアンケートを書いてもらったんです。

この、アンケートに答えてもらった文章が昨年度のフォーラムになっていったわけです。昨年パネリストを務めてくれた３人以外にも、40人近いかつての教え子からアンケートの回答がありました。

それらを自分なりに分析をしていくなかで、８つの意義に集約をしたんです。

１つ目は、ああいう学習をすることで、自分のことを大切な存在だと思えるようになっていく。

２つ目は、他者を大切な存在だと思えるようになっていく。この結果に私は驚いたんですね。

３つ目に伝えることの大切さ。伝えると言っても色々な表現方法があると思うんですけれども、しゃべることもその一つだし、例えば詩にするであるとか、歌うであるとか、イラストとかマンガに描くとか、演じるであるとか。その表現方法は何でもいいんですが、とにかく伝えるということです。

４つ目は、つながることの大切さ。よく言われますが、差別というのは人と人との関係を断ち切っていくことです。断ち切られたものを逆につないでいくのが人権学習だというようにも言われていますが、つないでいく大切さを感じます。

５つ目は、学び合うことの大切さ。討論とか、語り合いをしていく中で、いつの間にかお互いが学び合いをしている。今は、人権学習をテーマに話をしていますが、人権学習だけに限らず、他の教科においても、語り合うという基盤があるので学び合うという志向に入っていける。

６つ目は、人権学習をすること。

７つ目は、人と人として大切であるということ。A先生が自分のことを語るんですが、教師がまず語れということを、当時よく言っていました。そのことに今も変わりはありません。やはり教師が語ることが起点なんだろうなと思うんですが、そうすることによって、生徒が教師を教師としてみるということに間違いはないんですが、子どもたちの中には、どうやら先生は自分たちと対等な立場に立ってくれている。上から目線で、あれはいけない、これはいけないのではなくて、一緒の目線で考えようとしているというような認識になるようです。それは、子どもたちにとってもすごく大事なことで、人を人として大切にするということになると思うんです。

８つ目に、共に大切としているんですが、教職員同士の絆が変わったんです。当時の板野中学校の教員同士で今でも飲む機会が度々あります。連絡を取り合う機会が度々あります。板野中学校の時だけではなくて、それ以後もそうなんですが、今、私は八万中学校に勤めているんですが、八万中学校でも、そんな雰囲気になりつつあります。なにかこう、同じ思いで進む教員集団の関係性になっていっているような気がします。これが共に取り組んでいくことの大切さです。以上の８つに分類しました。

これらの分類した要素が、他の学校でも得られるのか得られないのかということを検証するために、全体学習のような学習形態をとっていない徳島市内の中学校で、１年生を対象に３回、みんなで語り合う学習をしました。やってみて、効果はあったなと思うんです。その効果のことを話し始めると、Dさんの時間が無くなるので、(会場に明るい笑い)詳しくは申しませんが、数値データーが全てを物語るわけではないという前提に立って聞いてください。

端的に言いますと、その３回みんなで語り合う学習をした１年生で、年度初めと年度終わりにアンケートを集計しました。２年生と３年生も同じように年度初めと年度の終わりにアンケートを実施しました。

すべての学年で人権学習を熱心に取り組んでおられました。それは私も目の当たりにしていましたからよくわかるんですが、１年生だけが学年４クラスで語り合う学習をしたんです。すると、人権学習というテーマでアンケートをとり、「人権学習は大切である」とか、「人権学習を進んで取り組んでみたいと思う」という項目設定をした結果、その学校の名誉のためにいますが、人権学習は本当に一生懸命やられていたんです。けれど、進んでやるという問いかけでは数値としては落ちていました。１年生だけなんです。この問いかけで数値の上がっていたのは。

「そういうことはやっても仕方がない」とか、「やっても無駄である」という子が存在し続けたんです。一生懸命やられていましたから、２年生３年生の先生方が悪いとは思っていないんです。私たちが目指したのは、子どもたちに人権文化を根付かせたいということです。「あの時に人権学習をやったよな」という記憶をきちんと持っていてもらいたいということです。

若い先生方に、学生の時にどんな人権学習をしたのかを聞くと、多くの先生方が人権学習を受けた記憶がないと言うんです。「やっていたのかもしれないけれどあまり覚えていない。」この、先生方が学生だった頃というのは、我々が教えた世代なんです。その当時の先生方が人権学習をやっていなかったのかというと、そんなことはないと思うんです。今20代の先生方が学生だった頃です。人権学習はやっていたはずなんですが、記憶に残っていないんです。そのことは厳粛にきちんと受け止めなくてはいけないと思うんです。

どういう学習をすれば記憶に残っていくのか、それ以降の人生に影響を与え続けていくのか、残り続けて

いくのか、そんな人権学習ってどういうものなのかなということを、もう一度検証しておく必要があるんだろうなと思うんです。

話を戻しますが、先ほどの中学１年生のアンケートのデーターですが、結論から言いますと、非常に失礼な言い方ですが、「先生が話をしても意味がない」ということです。こういう言い方をすると誤解を生じるかもしれませんが、教師が語ることも、教師が自分自身を語ることも、意味がなくはないんですが、生徒が自分たちの記憶として鮮明に残っていくのは、自分たちが語り合った体験です。そこではないのかなと思うんです。それが子どもたちの中で将来にわたって生きて残り、響いていく人権学習ではないだろうかということが、今私の中にある結論のひとつなんです。

ですから、どこの学校でも語り合いの人権学習をしていくことができたらと思うし、やってほしいなと思います。なかなかされていないという事実も聞きます。文部科学省の言葉はあまり好きではないんですが、今、文部科学省が「アクティブ・ラーニング」という言葉をよく使うようになっています。専門外の方にはわかりにくい言葉ですが、「アクティブ・ラーニングの手法でやろう」ということですが、実はそうではなく、「アクティブ・ラーニングの視点で授業をつくろう」ということなんです。

「アクティブ・ラーニングの視点」とはどういうことなのかというと、「主体的・対話的で深い学び」という定義づけをしています。もう一度ゆっくりと言いますね。「主体的・対話的で深い学び」それって、今までやってきた学習じゃないのと思うんです。みんなで語り合う人権学習がまさにそうではないのかなと思っています。そういう学習をこれからもやっていきたいし、多くの学校でやられていけたらと思います。(溢れるような笑顔で)すみません。長くなってしまいました。ごめんなさい。終わります。(会場の温かい笑いの中で拍手)

≪コーディネーター　A≫

(ニコニコと)時間との闘いになっていますが、ちょっとだけ時間をください。10年来、このフォーラムに参加していただいている鳥取のＳさん(倉吉市たんぽぽの会代表)、この後、後半で話をしていただけますが、(ピンク色のメッセージの入った小さな敷物を広げて会場に示しながら)「言葉に支えられ、言葉にきたえられる」というメッセージのお土産を頂きました。

その職場の仲間を信じ、家族を信じ、身近な人たちを信じ、本気で語った言葉というのはずっと残ります。言葉が人をつないでいく、そんな語り合いが一般化していく人権学習にしなければいけないと思うんです。ノルマの消化ではなく、言いわけ、アリバイの人権教育ではなくて、本当に「わがこと」が安心して言える、語り合いの人権学習です。

私は、このフォーラムが大人の全体学習(語り合いの人権学習)にずっとなってきたと思うんです。全員が発表するのは無理です。でも、ドキドキしながら聞くんです。「次は手を挙げて語ってみよう」「次は何か言おう」という気持ちで聞くんです。そのことが心を磨いていくんです。それがずっと残るんです。

30年前の授業が、20年前の授業が、10年前の授業がずっと残っていく。そういう学習が日本各地に普及していくんです。西日本各地と言いたいんですが、実は８月１日に新潟県の新発田市で、教職員の研修をしてほしいと言われて、教職員の全体学習を実施したんです。１時間、私が話をして、後半の１時間はそこに集まった地域の人を含めて、みんなでマイクをつないでいくんです。その一人一人の言葉が会場全体にしみこんでいきます。参加された皆さんが、その語りの事実を忘れませんよ。その時間というのは、語った人、その語りをひたむきに聴いた人にとって、大きなものになっていくんです。

このフォーラムには、小豆島の土庄町から毎年参加してくれます。その代表として、これから中学時代、土庄町全体で取り組んだ全体学習について、最高の笑顔で話をしてもらいます。本当にいつもＤさんの笑顔に癒されます。励まされます。その言葉はいつも力をくれます。それでは、Ｄさんお願いします。みんなが期待していますから。拍手をお願いします。(拍手)

≪パネリスト　D≫

（こぼれるような笑顔で）Ｄと申します。今、紹介して頂きましたので、精一杯の笑顔で語ろうと思います。今、お二方が話されていたのが、どちらかというと先生からのメッセージということで、私は、逆に生徒からの立場として語っていこうと思います。

皆さん疲れていると思いますが、私も緊張しているので、疲れている方は背伸びでもしてもらっても結構ですのでよろしくお願いします。

私のルーツというのは、少しややこしい話になるんですが、両親の再婚を機に部落に入りました。小学校５年生の時なんですが、母が部落の男性と再婚をするということで、私も別にいいよと答えていたんですけど、母がもう一度確認ということで、「部落の人になることは大丈夫？」と聞いてきました。

当時、私も部落というものを知らなかったので、「部落って何？」と聞いたら、「猫を轢いたら集団で来る地域よ」とか言われて、そんなことは聞いてこなかったので「ああ、いいよ」と二つ返事でＯＫしました。

小学校５年生で母が再婚して、中学校に入りました。２年生の授業の時に、本格的に同和教育の勉強をし始めて、部落に関するＤＶＤを観たんですね。それを観た時に「ああ、これ私のことだ」と思って、ＤＶＤを観た後の感想文に、「私は部落です。でも、差別されていません」と書いて提出をしたら、先生が「知っとったん？」と言うから、「知っていた」と言うと、徳島県の鳴門市である中学生交流集会に行ってみないかと誘われて、初めて中学生交流集会に参加しました。

参加してまず思ったのは、「すごいな」という思いでした。私と同じ学年の中学生ばかりなのに、笑いながら、泣きながら、全然知らない子もいる中でこんなことまで言うのというような、自分の赤裸々な部分まで語っていて、最初に思ったのは「私には無理だな」ということでした。それをきっかけに、私自身もちゃんと勉強したいなと思い、中学校での授業に積極的に参加していこうと思いました。

この会場には徳島の方が多いと思うんですが、小豆島というのは、「寝た子を起こすな」という考え方を持った方がたくさんいて、私の住んでいる地域の親も、「私のことを部落だと言わないでおいて。言う必要ない。黙っていたらわからない。」という人がほとんどで、積極的に勉強をと思ってもやりづらいところがあります。

子どもたちも、自分が部落の子だと知らない子たちばかりだから、自分とは関係ない。だいぶ前のことで、昔に終わったことだと思っていた。それは、私自身も小学校の時には同じように思っていたことで、そういう風土がある小豆島です。

そういう雰囲気ですので、授業の時にも寝ている子もいたんですね。それが、私からしたらすごく嫌で、「せっかくこうして勉強しているのに、何で寝るん？」とか、「何で、自分には関係ないと思ったん？」と思ってむかついたということはありました。

そういう授業をしていって、中学３年生になって本格的に「語り合いの学習」というのを始めるようになったんですが、その語り合いの学習の場で、私はまず、３年３組の自分のクラスで手を挙げて、「私は、みんなが語っている部落に住んでいます。何で、そんなに知らないふりをするの？何で、寝たりとか興味ないとか言えるん？」と怒りながら、そして、何を言っているのかわからないほど泣いてしまった記憶があります。

その次に気になるのが、友だちとか仲間の反応だと思うんですが、何と言ったかというと、「実は知っていた」と言うんです。何もそんなそぶりは見せなかったくせに、「実は、親から言われていたんだ。でも、そんなの言わなくてもいいんだと思っていた」とか、「私も知っていた」、「親に言われていた」。

昔に終わったことだと思わされていただけで、差別が見えていないだけで、裏では差別があるんだと実感したのがそのクラスでの発表でした。その授業の様子を、当時の担任の先生が学級通信にまとめてくれて、みんなの両親に配信をしました。そこで親から返ってきたコメントというのも、同じく学級通信で配信をし

ていきました。その親からの反応というのは、「部落の子と、友だちといて遊ぶのはいいけど、結婚となると別だ」という人がちょいちょいいたというのが現実です。

その授業の時の私の発言を聞いた同じクラスの子が、その発言をきっかけに、親とケンカをしてくれるようになったりとか、自分の親と、「部落の子と結婚したいと言ったらどうする？」「反対する」、「なんで？部落って悪いことじゃないよ」、こんなやり取りをしたことを泣きながら授業の中で語る子とか、私は、本当に仲間に恵まれたなと感じた時間でした。

そんな子たちがいるから、今回のパンフレットのメッセージにも書かせていただいたんですが、第１回の土庄町人権フェスタ、これは全校生徒が集まり、後ろに親や地域の人が参加できるようになっています。その場で、もう一度、「私がみんなが話している部落の出身ですよ」ということを語りました。その時にも語りながら泣いたんですけど、今なぜ泣いたのかなと思うと、怖いとか、辛いとかそういうことではなく、とにかく、その場で言わせてもらえる感と不安、それが一番大きかったと思います。

私はやっぱり、クラスの中で親とケンカをしてまで私のことを守ってくれる子がいたので、私はフェスタの場で語ることができたし、私が言っても絶対に誰かが支えてくれるという自信があったので、語れたんだなと思います。フェスタの場での学習は、地域の方も見ているんですけど、「子どもが真剣に語っている姿というのは考えさせられるものがあった」とういう反応があったのは、私には非常にうれしかったなと思いました。

小さいことですが、一歩でも前進できたらいいかなと思いました。現在のことですが、土庄中学校の時の仲間とはどうなっているかというと、最近あまり連絡は取りません。人権の話というのも、なかなかする機会はないんですけど、「私が今回鳴門市人権地域フォーラムで話をすることになったよ」と言うと、「頑張ってな」と絶対に言ってくれます。ここに一緒に参加はできないけれど、声をかけてくれたりとか、もし、どこかで差別に出遭った時に、彼ら彼女たちなら立ち向かってくれるんじゃないかな、それははっきり言うことができます。

私も、毎回毎回こういう会に来れるかどうかはわからないですけど、人権の勉強って、どこかに行って何かを勉強するだけではなくて、そのことについて考えるだけでも、１つのきっかけになったり、１つの大きな前進になったりするのではないかなと思っているので、こういう機会があれば、皆さんにお話することで、皆さんにとっても、私自身にとっても、１つのモチベーションになればいいかなと思います。ありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

いろんな思いが溢れてきます。このＢ先生に分析していただいた「差別・被差別を超える人権教育」、この書籍が、26年前の全体学習のスタートをよみがえらせてくれました。その、本気で語り合った子どもたちは、今、41歳になっていますけれど、その部落問題を語った思いは、ずっと一人一人の心の中に残っています。それが部落差別を見事に跳ね返していく力になり、彼らの絆をつくっていき、地域の絆をつくっていくことにつながってきたんだと思います。

昨年12月に、部落差別解消に関わる法律（部落差別の解消の推進に関する法律、略して部落差別解消推進法）ができました。それはやっぱり、絵に描いた餅ではなくて、生きて働くものとして、本当に、見事に部落差別をなくしていく取り組みとして私たちの日常をつくっていく、そういうびを積み上げていけたらと思います。

当時の記録により、言葉をこれほどに鮮明によみがえらせてくれる、この冊子「差別・被差別を超える人権教育」を通して、本当に言葉の力に感動します。後ろに紹介の原稿を貼らせていただいています。何冊か、その書籍自体も置いてありますので、めくっていただいて、こういうことなのかということを感じていただければと思います。図書館にも置いてありますので、読んでいただければと思います。

この後、10間休憩を取らせていただいて、後半「大人の全体学習」になります。こんな幸せな時間はないです。学校が変わる。語り合いによって地域が変わる。町が変わる。私たちの関係性が変わる。そんな語り合いができたらと思います。３人のパネリストの皆さんに拍手をお願いします。(会場から、大きな拍手)それでは、10分間の休憩に入ります。

前半終了

＝意見交換＝

≪コーディネーター　A≫

(しみじみと)Ｂ先生にも語っていただきましたが、なかなか卑屈な自分を脱することができません。今もずっと引きずりながら、私は教員になって36年目になりますが、子どもたちのひたむきな姿に癒され、励まされながら、子どもたちにきちっと応えていける自分でありたいと思うんです。

本気で自分のことが言える教室を作りたい。本当の思いが言える、それを本気で聞いてくれる、返してくれる、そういう教室でありたい、学年でありたい、そういう学校でありたい、そういう職場でありたい、そういう地域社会でありたい、そういう家族でありたいと思うんです。限られた時間です。３人の報告への思い、そして自分に重ねて部落問題を解決していくために、また、様々な人権課題を克服していくために、私に何が問われているか、自分自身のこと、そういう思いを語り合いながら、自分というものの内面を磨いていく、自分を高めていく、そんな時間になればと思います。

できるだけ多くの人にマイクを握ってもらって、会場が一つになれる時間になればうれしいです。それでは、語っていただく方、挙手をしてください。(後ろの男性を指名し)はい、お願いします。

≪フロア　K≫

香川県三豊市の人権教育課で指導員をしております。かつては中学校の教員もしておりました。今日は、鳴門市人権地域フォーラムには、昨年に続いて２年連続で参加させていただいております。３人のパネリストの話を聞きながら、私も自分に引き寄せていろんなことを考えながら、今日ここに座っておりました。

(一言一言を丁寧に)話のきっかけとして、私の市に、ある公立中学校がありまして、その中学校は高校１年生に入ったら、人権意識のアンケートをしています。そのアンケートの中で、「あなたはいつ同和問題について知りましたか？」という問いに対し、「小学校」と「中学校」を合わせて、大体96％くらいです。「誰から同和問題の話を聞きましたか？」という問いでも、「小学校の先生」「中学校の先生」という答えが、95％を超えるんです。ところが、「あなたは、同和問題について説明できますか？」という問いに対しては、「できる」と「ある程度できる」を合わせて30％ちょっとなんです。

要するに、うちの市では、高校生は、中学生までに同和問題と出会うんですが、自分の課題として、あるいは自分に引きつけて同和問題を教えられていないがために、きちんと説明できるという人が30％ちょっとしかつくれていない同和教育をやっているという、問題の多い実態があります。

(切々と)今日はそのことは置いておいて、私とＡ先生との関係について話をさせてもらいたいと思います。私が前に勤めていた豊中中学校へＡ先生においでいただいたのが、1996年…。豊中中学校では、「全校解放学習会」という会をやっていまして、そこへＡ先生をお招きしました。今、紹介いただいた板野中学校の全体学習。そのビデオを観ながら、板野中学校の生徒のことについてＡ先生が話をしてくれました。それを聞いた生徒たちからは、豊中中学校でもやりたいという声が上がりまして、豊中中学校では、「笑顔全体学習」と名付けているんですが、それが始まりでした。

翌1997年には、徳島でおこなわれている中学生集会(人権を語り合う中学生交流集会)に豊中中学校からも参加したんです。中学生集会に子どもたちを連れて行きながら、「徳島へ行ってしゃべることができるのかな」というようなことも心配していました。ところが会が始まると、そういう私の心配などはどこかへ吹き

飛んで、連れて行った豊中中学校の子どもたちもよく話すんです。それはなぜかなと考えていたら、参加していた子どもたちの熱気に触発されて、初めて参加したんですがよく話すんです。

中学生集会から帰って来てから、参加した子どもたちが、豊中中学校の「笑顔全体学習」も中心になっていきました。それから時がずっと流れて、10数年ぶりに、この7月30日に中学生交流集会に参加しました。今年もたくさんの中学生が集まって、そこで語り合いがおこなわれているんです。今年の中学生交流集会はいじめや障害がテーマになっていたと思うんです。

確かにたくさんの子どもの意見がつながって、たくさんの子どもがしゃべりました。でも、初めて参加した時のあの熱気というのはなくなってしまったのかなと感じました。今、C先生から、「印象に残る人権学習」が「語り合いの人権学習」なんだと言われました。私もそうだと思っています。

しかし、あの7月30日の中学生集会で後に残っていくのかなというのが、正直な気持ちです。その後でA先生が、本気で話す言葉というのはみんなの胸に残っていくと言われました。私もそうだと思っています。だとするなら、あの7月30日の語りというのは、本気の語りというのが少なかったのかなというふうに思っています。

(思いを込めて)それで一番初めのある公立高校の話に戻るんですけど、やっぱり、差別をなくしていこうとしたら、そのことを自分のこととして考えていく子を育てていく必要があると思います。本気で語るという部分をもう少し掘り下げていったら、本気で語り合いをしているけれど、それが後に残っていかないとしたら、問題があると思うんです。

Dさんのような語りができる子ども、これをどうやって育てていったらいいのかということを、私はこだわって今後考えていく必要があるなと思っています。結論から言うと、答えは出てこないのではないかと思っています。私のいる三豊市でも考えていきたいと思っています。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。(切々と)今の話ですけど、自分自身のこと、自分の心の底にあるもの、そのことが言葉にできた時に、その思いに返してくれます。そのやり取りの中で、なんとも言えない空気がそこに生まれます。(ニコニコと)Dさん、一言。

≪パネリスト　D≫

(ニコニコと立ち上がり)答えにはならないかもしれないんですが、私が自分のことを語るに至るまで、当時の私のクラスの先生がものすごく熱い人で、土庄町では、語り合いの学習を「心の集い」というんですが、その「心の集い」をどこでもやるんです。修学旅行のバスの中でもやるんです。

(会場から温かな笑い)これから川下りをするのに、バスの中でみんな泣きながら語り合いをするというような人で、その先生も、自分の病気のこととかを語って泣くんです。それを見た時に、私たち生徒は、「わあ、先生泣いてる。何でこんなに年が違うのに、私らにこんなことを言ってくれるんだろう。」と思うんです。

先生がその時に言ってくれたのは、「人権学習する時に、先生とか生徒とか、年齢とか関係ないだろう」と言ってくれたんです。それがすごくうれしくて、語る一つのきっかけになったと思います。(照れくさそうに)そういうことがありましたので、何か参考になれば…。

≪コーディネーター　A≫

ぜひ、つながってくれたらと思います。(前の席の高校生に)じゃあ、いきましょう。

≪フロア　K≫

高校３年生のＫです。よろしくお願いします。中高生による人権交流集会というのがあって、中学生から中高生による人権交流集会にもずっと参加していたんですけど、去年、私は、実は中高生による人権交流集会を逃げたんです。やっていてすごくしんどくて…。

(一言一言をかみしめるようにじっくりと)その場は、自分にとって自分の居場所だと思っていたのに、なぜか居りにくくて逃げてしまった時があって、今年は逃げずにやろうと思って、自分の最後で集大成だからやろうと思って…。中高生による人権交流集会というのは、西部、中部、東部とブロックが別れていて、私は、中部ブロックの会長をやらせてもらっているんですけど、さっきおっしゃっていた方がおられたんですけど、子どもが語れる場をつくるのは大人じゃないかと思っていて、やっぱり大人がその場を壊してはダメだなと思います。中学生や高校生が一生懸命話しているのに、その場を壊しているのは大人じゃないのかなと思っています。

(苦笑いしながら)私ってすごく短気で、怒りやすいタイプなんですけど、ある日、すごくイラッとすることがあって、(考えながら)生徒総会っていろんな高校でもあると思うんです。その生徒総会で、女の子でもズボンをはきたい子っているじゃないですか。普通に…。はいたらダメな理由って別にないじゃないですか。

何をはこうが何を着ようが自分の意思なんだから、それを他人に言われることって全くないと思うのに、いろんな高校でも、ズボンＯＫという高校もあるのに、その学校でもズボンはＯＫだったのに、ズボンに着用するのに、なぜ自主的ではダメなのかという話をしていた時に、ある１人の子が、女子がＯＫだったら男子もＯＫなんじゃないという話になってザワザワとなったらしいんです。

それを「先生がとめなくて…」という話をしたんですけど、ある１人の先生が、「あぁ、それせんでもいい、全部が悪い話じゃないから…」と言ったところがあって、「いや、待てよ。今そういう問題の話をしてるんじゃないから。」と思いました。(精一杯の思いを込めて)私はその場にいなくて、話を聞いただけなんですけど、先生がどうこう言う問題じゃないし、もしここにズボンをはきたいのにはけないと思う子がいて、自分の着たいものを着られないっていう、それをつくっていってしまっているのは生徒であり先生でもあるのに、それで先生の立場を考えるっていうのはおかしいんじゃないかと思って、そう考えていったら、大人がそういうやりやすい場をつくってあげるのが、子どもに対して一番やってあげるべきことじゃないかと思って…。

大人にすごく偉そうことを言ってしまうんですけど、子どもの立場からしたら、そういう場がないから、子どもはやりにくくて、自分たちの居場所を見つけにくいんじゃないかなと思います。そういうものを少し対処してほしいなと思っています。ありがとうございます。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

今、高校生がしゃべりましたけど、自分の本当に切ない部分を語り出した部分があって、それが家族のことであったりして、そういうやり取りの中で、子どもたちは変わっていくわけです。今年の中学生集会では、決意表明が精一杯という子どもたち多かったと思うんです。

でも、大勢の中で、200人近くの中で、ドキドキしながらマイクを握っていく。そのやり取りの中で、１つずつ階段を上っていくんだと思うんです。そして、その体験がまた次の会に参加したいと思うようになるんです。

(一言一言を力強く)特に、今年の中学生交流集会の、午前中の応神中学校の地区の子どもたちの言葉というのは、心に突き刺さってくるんです。地区の子が地区を知らない、教えられていないという現実がある中では、中学生同士の中で、板野中学校で実施された1990年や1991年のような、自らの立場を語る部落問題学習はなかなかできていません。表面的な所で終始しているんですが、やはり、私は繰り返し繰り返しやっていくことが必要だと思うんです。

(じっくりとかみしめるように)さっきの高校生の発言にもありましたが、教師が問われていると思うんで

す。教師である私たちに何ができるかということを問い続けていく。その中で、このこともおかしい、これもおかしいというような、いろんな言い分を聞きながら、いい関係をつくっていくことが、みんなが安心できる教室や学校、職場や地域社会をつくっていくことになると思うんです。

やっぱり、自分に何ができるかということです。私自身、心の内を表現していく中で、自分自身が解放されていく。自分の中にあった卑屈なもの、このことは人前で絶対にしゃべることはないと思っていたことが安心して言える。そのことが誇りになる。そんな語り合いが、そんな学び合いが、広がっていったらと思うんです。

すみません、限られた時間です。できるだけ多くの人にマイクを握ってもらえたらと思います。はい、ではマイクをお願いします。

≪フロア　S≫

(立ち上がり、会場の方に向かい)すみません、鳥取県から来させていただきました。この人権地域フォーラムで、A先生がコーディネーターを務められるようになった２回目(2005年度)から毎年来させていただいています。いつもここから多くの力をいただきます。ここで、中学生・高校生が本気でいろんなことを語ります。それを聞きながら、私は、この昼間、ここで受け止めた思いを、自分の足元で動いていかなければ返したことにはならないな、実になったことにはならないなという思いの中で、職場の中で仲間外しにあった時に、そのことへの思いを職場の中で伝えることができて、職場に一石を投じることができました。

(じっくりと)それから、私は小学校６年生の時からどもりがあって、それはやっぱり今でも引きずって、言葉に詰まる時もあります。それを周りの仲間になかなか伝えることができませんでした。今、自分をさらけ出すという表現もありましたけれども、これも、仲間の中で伝えることができるようになった。そこに自分をさらけ出せるようになった自分、自分に対して少し強くなった自分というものを感じます。

(一言一言に思いを込めて)私は今地元の同和教育推進協議会の会長をしております。15年続けていますけれども、同和地区のお母ちゃんたちからこんな声が聞かれます。小集落改善事業などで、いろんな苦労はいっぱいあるけど、念願だった家は広くなった。集団移転なども行われ、道路も広がって環境もよくなった。でもなあ、家の距離が遠くなった分、心の距離も遠くなった。以前は、「ひとりはみんなのために みんなはひとりのために」を大事にやってきたけれど、段々に人の意識も変わってきたと…。

本当に寂しそうにしみじみと語られたその言葉に、新しい現実を見たような気がしました。今、同和地区の中でも、こういう変化が出てきていますし、地区外にも、同和教育、人権教育から離れていきそうな空気の中で、私は３年前から、地元で、年度の最初の推進員研修では、倉吉市が市内全体で同和教育に取り組み始めて40数年になります。私が地元で会長として関わりだしてから15年になります。その中で、どのような思いでこの取り組みが始まり、どういう経過の中で、みんなの意識がどのように変わり、また変われない所があったのか、うちの地域ではこういうふうにこれまで進めてきて、これからどうしていこうとしているのかということを１時間半、２時間の時間を使いながら研修をするようにしています。

やはり原点を知ってもらって、たくさんの人が一度に変わらなくてもいい、本当に草の根的でもいいから、同和教育、人権教育っていいなと思ってもらえる、またやってみようかなと思ってもらえる、そういうものをめざして活動を続けています。以上です。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

(ニコニコと)はい、ありがとうございます。じゃあ、中学生。

≪フロア　中学生≫

小学校、中学校と人権学習をやってきたけど、それまでは自分には関係ない、遠い存在だと思っていまし

た。しかし、(松茂中学校の) ３年生になってＡ先生の授業を受けるようになってからは、考え方が変わって、人権学習がすごく身近になった気がします。社会に出た時、人権学習で学んだこと、自分が考える思いを忘れずに生きていきたいです。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

(うれしそうに溢れる笑顔で)私のクラスの生徒です。私は、今年度の人事異動で、松茂中学校に異動しました。松茂中学校で、私は15年ぶりに学級担任をしております。その学級開きの参観授業で、彼のお母さんが、一番に教室に来て授業を参観してくれました。その授業で一番最初に語ったのが、今発表してくれた生徒です。その彼の語りが仲間の語りを引き出し、心洗われる参観授業になりました。

それは、まさに生徒が生徒を変えていく人権学習です。その授業を実施した生徒たちと、１学期、学級担任として久しぶりに人権学習を積み上げ、４つの授業の記録がまとめられています。その学習の積み上げの中で、生徒の語りにより、他の生徒の語りが引き出され、生徒一人一人の語りの質が変わってきます。

その語りの中で、「わがこと」が「自分のこと」がいっぱい出てきます。その人権学習は、大きなよろこびになるんです。自分が好きになる。家族が好きになる。友だちが好きになる。そういう学びが、この学習の本質だと思うんです。人権問題を学ぶ、部落問題を学ぶ、障がい者の問題を学ぶ、そのことを通して自分に何が問われているか。自分に重ねて語っていく。自分を見つめていく、そんなやり取りが、私たち自身を人間として解放していくんだと思います。つないでいきましょう。はい、お願いします。

≪フロア　S≫

(ニコニコと立ち上がり)失礼します。徳島市川内町で農業をしています。Ｓです。いろんな立場の人がこの会場にいるんだなと思いながら、いろんな話を聞かせていただいておりました。いろんな考え方やいろんな価値観のある日本社会の中で、今日の人権フォーラムも含めて、こういう人権について考える会って大切なんかなと、自分にも問いかけたりしながら、皆さんの話を聞かせてもらっていました。

最近、ニュースとかでも、思いやりのない悲しいニュースが日々日常的に流れたり、ネットでの日常的な誹謗中傷、そして、僕らの小さい時にはなかったミサイルがもし飛んできたらこうしましょうという、非常に怖いテロップがＣＭの間に流れたり、なんか、これからどうなるのかなと思いながら、(一言一言を丁寧に)こうして人権について考えること、人に対して思いやりをもって生きること、自分を語ること、いろんな差別について考えることが必要なのかなと思いました。

(ニコニコと)今日、早朝の４時半頃から芋ほりして(会場に明るい笑い)ここに来ました。こういう会に来ることも必要なのかなと思って、今日ここへ来させてもらいました。僕はやっぱり人間味を持っていかなあかんというか、僕はずっと人権について関わっていきたいんです。

(しみじみと)僕は劣等感の塊のような小学校時代を送っていました。たまたま板野中学校の温かい先生方や友だちに出逢って、自分のことを好きでおれる幸せというか、僕はもうすぐ40歳になりますけど、人を大切にできる温かい思いというのが大事だと思っています。

(元気よくニコニコと)これからも、生き生きとキラキラと輝いて生きる姿を小学校に通う娘にも見てほしいんです。娘も今日ここに連れて来ようかなと思ったんですが、小学校低学年ではまだちょっと早いかなと思って連れてきませんでした。家庭で、地域で、いろんな所で、今日、Ｃ先生に教えていただいた、「アクティブラーニング」(会場に温かい笑い)の「主体的」で「対話的」で「深い学び」をこれからもしていきたいなと思いました。ありがとうございました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。では、一番後ろの方、お願いします。

≪フロア　U≫

僕は、今年、人権を語り合う中学生交流集会に参加させていただいきました。連れて行った中学生が200人くらいの前でしゃべれるかなと思っていたんですが、早い時間で手を挙げて自分を語っているのを見て、やはり、中学生同士が顔を合わせて、一生懸命言葉で語り合うということがすごいなと感じました。

両親が離婚したという話が出た時に、その子も両親が離婚していたんですが、そのことは一切中学校の中で語ることのなかった子が、語った子に自分を重ねて自分も語っていてですね。やはり、こういう雰囲気の場を続けていくことが大事なんだと思ったんです。ずっと続けていくということが、人権課題を自分なりに考えて、前向きに自分を磨いていくことになるんだと思います。

この集会でも、来られている方が、語った人も、手を挙げなかった人も、来ているだけで少しでも人権課題を解決したいなと思って聞いていると思いますから、こういう会をずっと続けて来られているＡ先生とか鳴門市というのは素晴らしいと思いますし、中学生集会もずっと続けて来られているということに敬意を表したいと思います。今日はありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。では前の方、どうぞ。（楽しそうに）発言者がいっぱいいますので、時間を短めにお願いします。（会場に温かい笑い）

≪フロア　大学生≫

（立ち上がり、あふれる思いを懸命に整理しながら）私の時には、Ｋさん（旧姓・結婚してＤに変わる）だったんですけど、Ｄさんの一つ下の学年で、一緒に初めての土庄人権フェスタをさせていただいて、ここの人権フォーラムにも何回か来たんですけど、いつもみんながしゃべっているのを聞いて、「ああ、私もこう思うな」とか思って、結局何もしゃべれずに終わっていました。

私は、とっても先生に恵まれて、中学校の時には、先輩方にも恵まれて、先輩みたいになりたいと思って、（言葉に詰まりながら）私も頑張ろうって思ったんですけど、自分の学年はあまり頑張ろうっていう方じゃなくて、もう１学年上だったら良かったなとか、ちょっと失礼なんですけどそう思って…。（懸命に涙をこらえながら、絞り出すように）高校に入って、みんな中学校の時みたいに思ってくれなくなって、中学校の時には真剣に考えていたのに、高校になってから全然考えてくれなくて、すごいショックだったのを覚えています。

全体で話すのも大事なんですけど、学年の方が話しやすいし、だから、全体で話せない子は学年で話せるし、自分も先生になりたいと思っているんですけど、小・中・高や地域の連携とかもしていけたらいいなと思っています。ありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。後ろの方。

≪フロア　F≫

（照れくさそうに）娘の話すのを聞いているのは恥ずかしいです。（コーディネーターが驚いたように「娘さん？」言葉が入り、会場が温かい笑いに包まれる中「ごめん、知らんかったわ！」コーディネーターの言葉が続く。発言者は雰囲気に少し戸惑いながら）毎年この会に来て、元気なのか、頑張れているのかと、見直す会にさせていただいています。

Ｄさん、僕らは「桃（もも）」と呼んでいるんですけど、桃のいた中学校に帰って来て、その子どもたちを

見ていたら、一人一人はいい子なんですけど、自分に自信がなく、友だちが信じられない、自分が好きになれないという子ばかりで、これを何とかしたいということで、学年でいろいろ工夫しました。

当時の担任と一緒に悩んでいって、A先生にも大変お世話になったんですが、先ずは自分の気持ちをワークシートに書けるようにしようかとか、クラスの中で何でもいいから自分のことを言ってみようか、言ったら絶対何か返していこう、そういう中から始まっていきました。

次々と子どもたちが成長していって、集団の人権学習として、全体学習をしようかと言ったら、生徒がうんうんと言ってくれて、修学旅行で長崎の夜に関わってみようかと言えば子どもたちが関わって、そんなことから段々自分のことを言いだしたので、周りが育ったし、他の子が本気で言い出したのでDさんも言えたと思うし、逆にDさんがあそこで言ってくれたから、周りも本気で変わって、自分の本当にしんどい部分を言ってくれたと思うんです。

その姿を見て、やはり教師集団が、これでは自分たちいかんな、もっと自分らが変わらないかんなと思わされたのを覚えています。今、一番思うのが、あの時の熱が自分にあるのか、あのころの周りの子の雰囲気が、今自分たちに作れているのかな、またあの頃の自分に返らないかんなみたいなことを思っています。ありがとうございました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。はい、それではお願いします。

≪フロア　M≫

Ｓがしゃべったので、僕もしゃべらなければと思って手を挙げました。これは初歩的な考えなんですけど、ここには初めて参加させてもらいました。板野中学校ＯＢのMと申します。

(一言一言を丁寧にゆっくりと)Ｃ先生の話で、僕はアンケートまだ出してないけど電話で話をして、自分も中学生から卒業して高校生友の会で活動をしてきました。今は板野町を離れたので、あまり参加できてないんですけど、部落解放同盟徳島県連合会中部ブロック連絡協議会というところで青年部長をしたりしながら、活動をしてきました。

今はちょっとできていないんですけど、こうして人権学習をしてきた子が親になって、自分は今も運動をしてきたけど、みんなはどう思っていたのかなというのはすごく気になっていて、託也なんかとも話をしたり、アンケートは出してないんですけど、自分の今の答えとしては、いろんな大きな意味も含めて、地区外の子が本気で考えられたということが一番大きいのと違うかなと思います。

(中学時代に思いを馳せながら)結局、当時はいろんな問題があったり、学習会があったり、学習会に行っていた子は絶対同和地区の子だったし、みんなが何となくこの子は部落の子やなとすぐわかる。部落の子も、生活実態を見ても、親の共働きも多かったし、親を見たらわかる、住んでいる地域を見たらわかるということなどがあって、自分を見つめることができやすかったんかなと思います。

そういう中で自分は、今も頑張ってきよるけど、やっぱりどこか頑張っている熱の温度の下がっているところもあり、結局、自分が企業の面接をする時とかに、住所を書く時に、「住所を書いて大丈夫かな」と思ってしまったり、板野町のＫというところに住んでいたんですが、住所を書いたものを渡す時に、渡しにくいという状況があったりして、自分はどれだけ頑張っても変わってないのかなと、子どもを持つようになって、より思っています。

(精一杯の思いを込めて、丁寧に)そんな中で、中学生集会とか、全体学習とか今も続けているように、僕は、全国規模の組織に期待した時期もあっても、今ちょっと衰退して何をしているのかわからないという中で、それでも、そういう厳しい中でも頑張って続けておられていることって、ものすごく大切だなと思います。

今日参加したのも、一人の親として、先生への警告ではないですけど、板野町の小・中学校の先生とかに、「生温い人権学習していたらこらえんぞ」（苦笑しながら）という思いで参加させてもらっています。やっぱり、託也が発言したら衝動的にしゃべりたくなるというのが、しんどいことを語り合ってきた中で、応えていかないかん、あいつが頑張れば自分も頑張る、あいつが何か伝えたら俺も応えるという思いが衝動的に出てしまって、しゃべらせてもらいました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

（ニコニコと）ありがとうございました。本当に、こういう自分を語る時間になればと思います。（終了時間が近づく中、複数の手が挙がり、よろこびを噛みしめるように、手の挙がった人の順番を示し）それでは、こういって、こういって、こうで発言を切らせていただきます。では、お願いします。

≪フロア　S≫

（溢れる笑顔で元気よく）徳島北高校のＳ（2015年度藍住中学校卒業生）です。（会場を見渡しながら）徳島北高校の先生、この中にいらっしゃいますか？（会場から手が挙がり、驚いたように）あ、いらっしゃった。え？徳島北高の先生ですが。いらっしゃいませんか。ああ、よかった。（会場に温かい笑い）よかったって…、おられてもいいんですけど…。（再び明るい笑いに会場が包まれる）

さっき、Ｋ先輩（高校３年・藍住中学校卒業生）のおっしゃったことは、実際に自分の学校で起こっていることなんですけど、ちょっと事実と違うところがあったんですけど、あることがあって、そのことについて先生に話をすることがよくあって、いろんな先生といろんな話をしてるんですけど、めっちゃ正直に言っていいですか。

（少し言いにくそうに）全員の先生がそうじゃないんですけど、今、高校の先生に心を許せないというか、心を預けられないというか、話をできんような状況になってしまっていて、直接話をしても、いろんな考え方があるじゃないですか。（溢れる思いを懸命に整理しながら）差別的な考え方の方がおるのもわかるし、それを自分は変えようとしているつもりでもないんですけど、それを知った時の辛さってあるじゃないですか。それを耐えているんですけど、話し合う時に平行線みたいな感じで、進学校というのもあるんでしょうが、勉強とかに力を入れなくちゃならないから、いろんなことで忙しいということもあるけど、だからできないと言われても、起きている問題で傷ついている人がたくさんいるのに、できない理由をいっぱいいっぱい言われている状況に今なって、私はどうしたらいいか本当にわからんし、怒りでもないけど、あきらめそうになっていて、どうしようかなと思っています。

（懸命に自分とも対話するように）今日も、自分にできることをとおっしゃっていたじゃないですか。できることは、今日もいっぱい考える中で、たとえどんなに言われても、伝えられることは伝えなければと思っているんですけど、直接言った時の怖さもあるし、本当にどうしたらいいかわからなくて…。（思いを切り替えるように、笑顔で）今日、人権フォーラムに来て、「語り合いの人権学習」とか、懐かしいようなことも聞いて、いろんな方のいろんな話を聞いて、ヒントになったようなものがあった気がして、それをこれからやっていこうかなとか、そんな気持ちで、良くなるように頑張ります。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

はい、続いてお願いします。

≪フロア　N≫

神奈川県の藤沢市から来ました。前に来た時にも僕だけじゃないんですけど、Ａ先生に年の順と言われて、（会場に明るい笑い）また後になったかと思って、毎年そんなことをやっているんですが、Ｄさんが結婚され

て、神奈川県に来たよと言われて、私、神奈川県なんです。そして、藤沢市だよと言われて、しばらく住所がわからなかったんですけど、住所を聞いたら、私がバスで通っているところで、偶然この間お会いして、楽しい時間を過ごしたんです。

私の息子が２人いまして、ちょうど同じ頃に結婚をしました。自分が親になって、自分の子どもが結婚する。男の子と女の子は違うと思うんですが、こんなことを言うと、また差別だと言われそうですが、男の子だからかあまり考えなかったですね。結婚すると言われて、そうか相手を見つけて良かったなくらいで、相手の親御さんとご一緒に会食して、すぐそばに暮らすようになりました。

（一言一言をかみしめるように）さっきＡ先生の話の中に結婚差別の話がありましたが、不思議に思うのは、やっぱり違う親から生まれて、違う家庭環境で育って、違う地域で育って、偶然巡り会って、お互いに一緒になってやっていこうとなる。それは、子どもにとっても親にとってもそうですけど、結婚というのは一つの大きなことで、もちろん結婚しない人生もあるわけですけど、そういう大きなところで決めたことなら、親として支えていこうと思います。

結婚差別は結婚をなくそうという働きかけですけど、そうではなくても、結婚して生活するためには解決をしなければならないことはたくさんあるわけです。細かいことでも。それを、私たちも相手の親もできることはお互いやりましょうという話で、良かったなと思うんですけど、これはこの人権フォーラムだけではなく、地元でも学んできたことなんですが、Ｄさんと同じ時期に結婚したということで話をさせていただきました。

（うれしそうに）毎年ここに来られてありがたいなと思います。さっき、こうして続けていることがすごいというフロアからの発言がありましたが、私も本当にすごいなと思っています。また来年も来るのを楽しみにしています。ありがとうございました。（拍手）

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。それでは、最後にＯさんから、三重県の方に行きます。

≪フロア　O≫

小豆島から来ました、Ｏです。Ｄさんと高校の時から一緒に人権の活動をやり始めたということで、今日ここに来させていただきました。自分のことになるんですけど、Ｃ先生の言われた８つのキーワードですけど、その中に、「伝えることの大切さ」「共に大切に」というのがありましたが、私の職場でも、70歳を超えている先輩にも、「Ｏの実家は同和でお金が出るやろ」と言われて、（呆れたように）「はあ…？出んと思うけど」と思ったりとか、40代の先輩からも「おまえの家、家賃払わんでええやろ」と言われて、「いやあ、家賃払わな住めんと思うけど」と思うようなことがあります。

職場の中でそこまでしか言えてなくて、もっと自分が伝えることを伝えていって、職場の先輩とも共に大切にしていけたら、もっと温かい人間になれるのかなと思って、話を聞かせていただきました。ありがとうございました。（拍手）

≪フロア　M≫

Ａ先生に三重県四日市に来ていただいて、全体学習ということで、私もその学習に参加をさせていただいて、こんなことが起こるんだということを経験させていただいて、今日もここに来ているんですが、私自身は、父親が部落の出身で、母親が部落の外で生まれ育ち、その２人が結婚して私が生まれました。私は、この年になって、ある程度学習するようになって、自分の生まれた時のことが段々わかってきました。

そういうことで、Ｂ先生にまとめていただいた「差別・被差別からの関係」とはどういうことなのかということで、私は、一緒に部落問題学習を進めていく上で、どんな立場で私はしゃべることができるんだろう

と考えています。(切々と)自分のような立場の人間はたくさんいるんです。

だから、どんな立場にあっても、部落問題について、同和教育について、「ひとごと」から自分のことだということを語りつないで、自分のことを伝えていく、お互いの値打ちを認め合っていく。お互いが尊敬し合って、他人のことを大事に思っていくということは、どの町でも、どんな人とでも、積み上げていくことのできるものだということを、この徳島で学ばせてもらったことに感謝します。今日はありがとうございました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。それでは最後です。どうぞ。

≪フロア　M≫

(元気よく)大阪で小学校の教員をしています。夏休みで、人権フォーラムに参加させてもらおうと帰ってきました。２点だけ話をさせてください。

１点目は、前の３人のパネリストの話を聞かせてもらって、言葉だけの人権学習には限界がある。いくら差別をなくそうと思って「差別はいけません」「人権を守りましょう」と語っても、そこに「わがこと」を伝えていかないと、学ぶものがないんだということを、３人の話を聞いて思いました。

僕は結婚する時も、(部落出身という)自分のことを打ち明けて、その時に、連れ合いの親御さんからは「そんなことは関係ない。応援するよ」と言ってもらいました。でも、同じ地域の、同じくらいの年の子の話を聞いていると、結婚する時にゴチャゴチャなるんですね。話をよく聞くと、最初に言った、「人を大事にしましょう」とか、「家族を大事にしましょう」ということがあるがゆえに、(皮肉をユーモアに変えて)「お前のことを思って、部落の人は一緒になるなと言っているんだ」というふうに「愛」があるがゆえに差別するんだなということが、今、若い世代の間で起こっているなと感じます。心がけだけではなく、社会のしくみの中でいろんな差別があるということをわかって、自分としてはどうしていくんだと考えないと難しいと思います。

２点目は、自分が小学校の現場で、Ａ先生がやっているような語り合いができているのかというと、難しいところがあるんです。小学校だけではなく、中学校でもなかなかできていないという現実があるんですけど、やはり、自分たちも高めていかなければならない所はあると思うんですが、学校だけで全部やろうとするから、できる学校とできない学校ができてしまうと思います。

(懸命に思いを整理しながら)学校だけで人権教育をしていないということは大事なことで、校区を見た時に、部落の人だけではなく、学校のために動いている人がどれだけいるかなということを考えながら見つめていくと、たくさんいて、「この人もいる」「この人もいる」となると思うんです。その人たちを見つめていくと、人権の課題も見えてくるので、学校だけでなく地域も元気になっていくんだと思います。

今日集まっている皆さんもそうですけど、歩みを止めないということが大切だと思います。

高校生が何人も切ない話をしてくれたんですけど、中学校まで頑張っていても、高校に入った時や、大学に入った時にその壁にあたるので、その相談したいと思った時に、あの先生に相談したいのにどこへ行ったかわからないとか、あれだけ熱く語ってくれていたのに今は全然つながらないというようなことって、本当に切ないなと思うので、卒業した後もつながっていきたいなと思いました。ありがとうございました。(拍手)

≪コーディネーター　A≫

ありがとうございました。(ニコニコと)しゃべりたい人はいっぱいいるんですけど、ここで切らせていただいて、パネリストにマイクを回します。Ｂ先生、お願いします。

≪パネリスト　B≫

（丁寧にゆっくりと）私が資料に書いているところの一番最後だと思いますが、⑧というところに「教員たちの世間」という、当時の板野中学校の校長先生が、2000年に『峠を越えて』という冊子の中で語っておられる文章を載せています。そこを読んでみます。

「かつてＴ（徳島）県下で教育困難校と言われた板野中学校が、この10年間問題なく過ぎ、生徒の態度がよくなってきた一因が、全体学習を行い、その全体学習を誰でも参観に来ていただけるように公開にしたところにあると言えよう。それだけに先生方のご苦労も大変だったことは確かである。以前は『板野中学校は荒れている学校だから行きたくない。』と言っていた先生方が、今は『板野中学校に行くと全体学習をしなければならないから嫌だ。』という声も聞こえる。」

Ｃ先生、この言葉についてどう思われますか？（会場に笑いが起こる）

≪パネリスト　C≫

（困ったような苦笑いをしながら）どうって…、その通りですね。

≪パネリスト　B≫

（確認するように）その通りでいいですか？（Ｃさんから「その通りですね」繰り返されるなか、今度は振る方向を変える）Ａ先生はどう思われますか？

≪コーディネーター　A≫

実は、自分を語るということは、やっぱりエネルギーがいるんですね。それが、語れた瞬間によろこびになっていくんです。これは、語ろうと思って立ち上がった瞬間、頭が真っ白になるんです。自分が何を言っているのかわからないんです。（段々と言葉に熱がこもりながら）そういうことを繰り返していく中で、語るということがよろこびになるんです。

本気でしゃべったら子どもが聞いてくれる。そのよろこびを感じているんです。やっぱりそこまで行かなければ広がっていきません。でも、実際にそういうふうに言われた先生もおられますが、そういう先生方もいっぱい変わって来ておられるんです。何で板野に来たんだろうかと思われていた先生が、１年、いや、半年で本当に変わっていかれる先生にいっぱい出会ってきました。

やっぱり、知らなかったら、表面的なことしか見ていなかったら、そんなふうにも思えますが、関わることで実際に変わるし、それが我々のよろこびになりました。答えになっていないかもしれませんが…。

≪パネリスト　B≫

はい、どうもありがとうございました。

≪コーディネーター　A≫

時間が来ました。最後に、是非ここで締めくくっておきたいと思います。Ｂ先生が最後に読まれたように、ある時期、板野中学校の全体学習をずっと公開してきました。毎月、全体学習があるんです。年度始めに、年間15回の全体学習の日程を書き込んだ全体学習カレンダーというものをつくった年もありました。

その公開した全体学習に、毎回来ている県外の学校があるんです。香川県の鶴尾中学校は、板野中学校の全体学習を取り入れ、学校を建て直していくという願いを持って、毎回、２人の先生が参観においでていました。

昨年度と今年度の人権フォーラムのチラシに使った写真は、1994年に徳島県で開催された第46回全国同和

教育研究大会の関連行事として公開した板野中学校の全校全体学習の写真です。実は、この全校全体学習を実施するに当たって、どの学年のどのクラスが、この体育館の真ん中で公開授業をするかで取り合いになったんです。それは、それぞれの先生が、自分のクラスの子どもたちに自信があるからなんです。自分のクラスの子どもたちを誇りに思っているんです。クラスの子どもたちを心の底から愛おしいと思っているんです。だからこそ、学校をあげて取り組む全体学習の舞台に立たせたいと思うんです。

そんな先生方の思いが溢れる中で、その授業者を勝ち取ったのがＣさんです。その時にＣ学級が、丸岡忠雄さんの「ふるさと」の詩を資料に授業をするんですが、Ｃさんは、丸岡さんの故郷へ丸岡さんに会いに行くんです。会いに行っても、丸岡さんはもう亡くなられていますから、会うことはできません。でも、その丸岡さんが住んでおられた山口県の光市へ行くんです。そして、詩「ふるさと」に込められた丸岡さんの思いを感じ取り、その思いを子どもたちに伝えることを通して授業をつくっていきました。

その授業の中で、「サライ」という曲がＣ学級の子どもたちの心を揺さぶっていきます。今日は、最後に皆さんと谷村新司：作詞、加山雄三：作曲の「サライ」を歌ってこの会をしめたいと思います。今日の資料をめくってください。そこに「サライ」の歌詞が付けてあります。その右のページに、谷村新司の手紙が付けてあります。その説明をＣさんにしてもらいます。

≪パネリスト　C≫

（照れくさそうに）手紙の話だけします。（と言いながら）今、八万中学校に勤務しています。そこで7月13日に、こういう写真のような形の学年全体の全体学習をしました。とても素敵な時間になったんですが、そのうちの１人の感想を聞いてください。

「私は改めて人権は大切だと感じた。最後の友だちのこととか話し合った時、たくさんの人が発言してくれて、その意見を聞いていると、私も心がホッコリしました。自分で説明しにくいんだけど、でも、心が温かくなりました。こういうことを話し合うのはとてもいいと思いました。あの話し合いの後、改めて人権について考え直しました。また、話したことのない人もたくさんいます。できれば積極的に話かけができればと思っています。できればというよりも、意識を持って私から先に声をかけるとか、話しかけるとか、結構難しく感じるんです。でも、これからはどんどん話しかけていって、友だちをつくってみようという気持ちになりました。なんというか、自分に自信が持てるようになってきたのかもしれません。」

この感想を書いた子は、厳しい状況にある子だということが、後からわかってきました。みんなが発言できればいいんですけれども、みんなが発言できなくてもいいんだと思っています。リーダーシップを発揮する子もいれば、聞くだけの子がいてもいいと思っています。

中学生集会もやってきました。全体学習もやってきました。語り合いと言ったら言葉が緩いんですが、ある意味、僕は闘いだと思っています。だから、いい時もあれば、なかなか難しい時もあるのも事実です。それでも続けていきたいというのは、子どもたちの思いがあるからだと思っています。一昨年ですか、アンケートにこんなふうに書いてきてくれた子がいました。

「懐かしい歌を聞けば当時が走馬灯のように思い出されます。でも、3日前のことを覚えていません。これって記憶じゃなくて、感動で心に響いているからですね。席まで覚えています。体育館の校庭側、前列3番目でした。向かいの窓から職員室越しに青い空が見えました。」

20年前の状況をいまだに覚えている子がいました。すぐに結果を求めたいんですが、こういうものを僕らは提供していかなければならないと思うんです。

それで、この「サライ」なんですが、(どう話を進めようかと迷いながら)丸岡さんの「ふるさと」と、この「サライ」が当時、私の中で重なりました。「ふるさと」の詩をご存じない方はわかりづらいかもわかりませんが、友のことを語り、家族を語り、ふるさとを語り、その中で、命を落とした仲間がいるという詩なんですが、その詩とこの歌詞が、僕の中で重なったんです。この歌詞を選んできたのは、この写真の中にある当時のクラスの子どもたちです。これを歌って授業を始めたいと言いました。子どもたちの意思を尊重していくなかで、この歌を歌って授業をすることになったんですが、この授業の２週間前に私は、山口県光市の丸岡さんの故郷へ１人で車を走らせていってきました。

その場に行ってみなければ、理屈じゃなくて、そこで感じなければわからないことがあるだろうと思って行ったんです。すごく行ってよかったなと思いますし、行ったことを、翌日クラスの子どもたちに話をしました。子どもたちの目が輝いていました。この授業に向けて、準備をしているさなか、当日の５日前に、谷村さんからこの手紙が届いたんです。

「お手紙ありがとうございました。

サライがたくさんの人に愛されていることを改めて実感しました。

当日はリハーサルのため行けませんが、成功を祈っています。「夢は夢にあらず」この言葉を贈ります。頑張ってください。

11月19日

谷村新司」

(しみじみと)子どもたちが谷村さんに手紙を出したんです。そうしたらこの手紙が返ってきました。すぐさま教室に帰って子どもらに「手紙が届いていた」と言うと、驚いていました。けれども、もっと驚いたのは、翌日の朝、私に駆け寄ってきた子どもたちが「私の家にも届いていた」と言うんです。この谷村さんへの手紙を書いた子どもたち全員に、返事が返って来ていたんです。

(力を込めて)その翌年にコンサートとトークショーに、たまたま徳島に来られたんですが、事務所の方に連絡をして、会えないかという打診をしたら電話がかかってきて、「谷村さんもよくその時のことは覚えています。ぜひお会いしたいので、コンサートの前に楽屋へおいでください。」とお返事をいただいたんですが、実際にはコンサートの後になったんですが、30分ほどお話をさせていただきました。

谷村さんには谷村さんの思いがあって、返事のはがきを出されたそうです。普通は出さないと言っておられました。やっぱり、あの子どもたちが谷村さんに出した手紙は、心を動かすものだったんだろうなと思います。

しゃべり出したらきりがないので、(ニッコリと)歌にいきますか？それでは、皆さん立って一緒に歌いましょうか。

《全員立ち上がり「サライ」の大合唱が始まる》

サ　ラ　イ

遠い夢　すてきれずに　故郷(ふるさと)をすてた
穏(おだ)やかな　春の陽射(ひざ)しが　ゆれる　小さな駅舎(えき)
別離(わかれ)より　悲しみより　憧憬(あこがれ)はつよく
淋(さび)しさと　背中(せなか)あわせの　ひとりきりの　旅立ち

動き始めた　汽車の窓辺(まどべ)を
流れてゆく　景色だけを　じっと見ていた

サクラ吹雪の　サライの空は
哀しい程　青く澄んで　胸が震えた

恋をして　恋に破れ　眠れずに過ごす
アパートの　窓ガラス越し　見てた　夜空の星
この街で　夢追うなら　もう少し強く
ならなけりゃ　時の流れに　負けてしまいそうで

動き始めた　朝の街角
人の群れに　埋もれながら　空を見上げた
サクラ吹雪の　サライの空へ
流れてゆく　白い雲に　胸が震えた

離れれば　離れる程　なおさらつのる
この想い　忘れられずに　ひらく　古いアルバム
若い日の　父と母に　包まれて過ぎた
やわらかな　日々の暮らしを　なぞりながら生きる

まぶたとじれば　浮かぶ景色が
迷いながら　いつか帰る　愛の故郷
サクラ吹雪の　サライの空へ
いつか帰る　その時まで　夢はすてない

まぶたとじれば　浮かぶ景色が
迷いながら　いつか帰る　愛の故郷
サクラ吹雪の　サライの空へ
いつか帰る　いつか帰る　きっと帰るから

≪コーディネーター　A≫

部落差別解消を願う、皆さんの思いが込められた感動の歌声が会場に響きました。皆さん、本当にありがとうございました。以上をもちまして2017年度鳴門市人権地域フォーラムを終了します。

終了

≪参加者の意見・感想≫

◎「今年の中学生集会は熱気がない」と私が言ったままで終わるのが忍びなかった。はじまった頃の中学生集会は、板野中の生徒が中心で(部落出身という)立場にかかわったことの発言がほとんどだった。みんなそのことを言うことが、今の自分を保ち続けることだったので必死だったし、本気だった。その当時のそういう雰囲気は今年はなかった。「地区の子が地区のことを知らない」ということが一番大きいと思う。時代は変わっているので、自らが変わるのは仕方ないけど、地区の子が自分の立場を語るのと同じぐらいの本気の発言を引き出すために、どういう工夫がいるかということを考えていきたいというのが一番言いたかったことです。

◎部落差別をなくすための自分の歩みを止めない原点を大切にしたいという３時間でした。ありがとうございました。
◎「語り合う人権教育」を自分にできる形で自分とつながる人たちとつくっていきたいと思います。ありがとうございました。
◎何年前か忘れたが「峠を越えて」を購入したとき、全体学習の様子がありのままに書かれており、感動したことを覚えている。自分をさらけ出すことができている中学生も、すばらしいな…と。私は小学校の教員をしているが若いときは同和問題について研修し指導してきた。時代がうつりかわっていく中、さまざまな人権問題をとりあげいていくことになり、こんなことでいいのだろうか…、と不安な思い・不満を抱え続けている。もう今年で退職するのだが、部落差別がなくなっていない今、若いとかベテランとか関係なく学校では全ての先生にしっかり同和問題について指導していってほしいと願っている。（徳島県以外からたくさんの方がおいでていたので驚きました）
◎Ｂ教授の丁寧な説明に聞き入りました。真剣な対応に頭が下がりました。学習者が学習者を変えていく…。お身体にはくれぐれもお気をつけて下さい。Ａ先生、Ｃ先生、Ｄさんありがとうございました。「本気で語る言葉が記憶に残る時をつくり、人生を支える。」今日もすごく悲しくなったり、ホッとしたりしながら聴いていました。
◎後ろのパネルの展示が素晴らしいです。ありがとうございました
◎パネリストのお話を聞き、今の自分を振り返ることができました。今の自分が回りの人との関わりを深めようとできていないことに気づきました。また、明日から人を信じて頑張ろうと思います。
◎高校生にとっては内容が難しかった。自分も発表したかったです。
◎とてもよかった。いろんな人の意見が聞けた。発言したかった。
◎意見を「話す」ではなく思いを「語る」。教員として、子どもたちに向き合って語ることがどれだけできていたのかと考えさせられます。気づかないうちに、私自身もきれいな言葉ばかりを選んで話していたのではないかとー。「こんなこと言ったら怒られるんじゃないか笑われるんじゃないか」誰しもの中に不安も葛藤もあります。（中学生に限らず）もっと私自身の心を開いて、生徒たちと一緒に学んでいきたいと強く思いました。
◎本気で学んで伝え合うことの大切さをあらためて実感しました。また今日から取り組みを続けていきたいと思います。
◎先生方の御講演も素晴らしいのですが、体験談をもっと入れていただけると説得力があるのではないでしょうか。休憩後の第二部では自主的に発表がありました。とても効果的で良かったと思います。本日は出席させていただき有難うございました。
◎様々な年代や立場の人たちの集まりの中で深い話し合いが出来てよかったです。
◎「ひとごと」になってしまうことが、多い世の中で「わがこと」に考えることが何かの解決の糸口になると思います。熱い想いはごうごうと燃えるときもあれば、ともしびのように弱いときもあると思います。小さい炎でも仲のよい人依頼する人が炎をもりあげてくれるときがあると思います。今も残る負のスパイラルをどのようにたち切るかをアドバイスをもらいたかったのですが自分の勉強不足が足を引っぱり（自信がなく）発言はできなかったですが、もっと人権についてなかまとつながり語り合っていきたいと思います。
◎今日は参加できてよかったです。ありがとうございました。
◎大変深く考える機会を与えてくださってありがとうございました。今後も人権・同和教育に関わっていこうと思います。
◎今後私にできることを実践していこうとする気持ちが更にふるいたちました。ありがとうございました。
◎毎年毎年ありがとうございます。このフォーラムをひらいていただいている事に感謝します。
◎「ひとごと」から「わがこと」へかえていくためには学んだことを、まわりに伝えていく必要があること

を改めて気がついた。人に自分のことを伝えることで人もまた心をひらいてくれていくのだと思った。できないという理由で話し合う機会をへらしてしまっている。自分の教育観を考えなおすきっかけになった。ありがとうございました。
◎皆さんの様々な思いを聞け、人権問題についてもう一度考える良い機会になりました。
◎ありがとうございました。今後も人権学習を頑張っていきたいと思います。
◎また力をいただきました。何ともいえない思いが動めいています。ゆっくりと自分を見つめて次の一歩をふみたいです
◎今後も熱をもって「心を磨いて」いきたいです。ありがとうございました。
◎本気の言葉を通して伝えあうことで心がみがかれる。ありがとうございました。
◎自分もあまり発表できるタイプではないけれどもこういう会に参加する事が大事だと思っています。
◎今日、参加できて本当に良かったと思います。子供の育成を支援する仕事なので、今までもそうだったのですが一人一人の心の支えになる人でありたいし、気になる子には向き合って対応していこうと思いました。今日はありがとうございました。
◎「自分にできることは何か？」を考えていきたいとおっしゃられたＡ先生の言葉をきいて心に刺さりました。ありがとうございました。
◎参加者、パネリストの方々の熱いお話を聞いて自分自身の人権感覚を見つめ直す機会となりました。ありがとうございました。
◎自分達が大人になれば差別などなくなると思っていたが、そんな事もなく今にいたる。ネットでの心ない書きこみ等、人は差別したがる生物なのですね。
◎後半の「全体学習」は大変参考になり感動した。お一人お一人の語りが心にしみました。語ることの難しさを感じつつ、語ることで、心が動くことを改めて思いました。何より続けることの大切さ意味を痛感しました。
◎Ｂ先生と久しぶりにお目にかかることができ、なつかしく思っています。鳴教大大学院で同和教育について語り合ったことを思い出しています。今、私は大谷町内会会長をしています。先日も大麻中学生の人権問題意見発表を聞く機会がありました。このフォーラムには２年ぶりの参加です。私はこのフォーラムが楽しみです。なぜなら心が熱くなるからです。みんなが本音で語り合うからです。今回もＤさんの話が印象的でした。その他の人の話は生きていく糧となりました。「サライ」を最後にみんなで歌ったのもよかった。
◎たくさんの方々の気持ちを聞くことができ、伝えることの大切さを感じました。ありがとうございました。
◎今日は色々と考える機会をいただいたと思います。部落問題とは関係ない話ですが中学生の息子が自分の意志で学びたいと県外で頑張っています。最後の「サライ」の曲、息子は「ふるさと」を捨てたわけではないですが、私にはこの歌詞がつらくって、泣きながら歌いました。今、夏休みで帰省してますので、帰ったら息子にも人権の話をしようと思います
◎この問題について全国民が正しい知識内容を知り、自分自身で考え皆と自分(個人)の考えを語り合いその中から正しく自分で結論を出せるようにする為にも今後も知る、語る、考える機会を多く行う事が大切。また、広めるよう努力する。自分の事として継続(勉強)します。